

はじめに

皆さん方が、花園大学に入学されたことを心から歓迎したいと思います。この大学には人権教育研究委員会というものがありまして、私はその委員長をしております西野と申します。こういう委員会があることからもおわかりのように、花園大学は人権教育、研究に力を注いでいるわけです。これからの講演会もその一環だとお考えいただきたいと思います。人権教育と言うと、またかとうんざりされる向きもわからないわけではないですが、本学の取り組みは、これまで皆さん方が受けてこられた人権教育といささか趣を異にしておりまして、できるだけホンネで話し合えることをモットーとしております。もちろん差別的な言動は厳に慎むべきであることは変わりないわけですが、かと言ってあまり言葉にこだわっていますと、素直に自分の気持ちを表すことができない。本当にこの問題を理解することができないのではないか。素直に自分が思ったことをぶつけあう、その中から互いに人権感覚を高めていこうという取り組みをやっているわけです。まだ皆さんは入学されたばかりでありますし、これだけ大勢の方と話し合うのはむりかと思えます。したがって、今日は、壇上からのお話を聞いていただ

くこととなります。その代わり今日はすばらしい講師を用意させていただきました。辻光文先生です。先生は花園大学で社会福祉学部の講師をされていますと同時に、全学の皆さんの学生カウンセラーとして学生生活の上で悩み事、問題が起こった場合、親身になってご相談を受けていただいている先生であり、時には就職などのお世話をしていただいている非常に面倒みのいい先生であります。先生は花園大学のご出身ですので、皆さん方の大先輩であるということにもなると思います。先生は長年、大阪の児童施設におきまして、主として非行少年と呼ばれる人たちと文字通り寝食を共にしてこられた方です。今は花園大学の仕事の他に、地元でも多彩な活動をされている先生であります。今日のテーマは「学生と性」という、皆さん方も関心のあるテーマでもありますし、興味深く聞けることと思います。それでは辻先生をご紹介します。どうぞ拍手をもってお迎えいただきたいと思います。

2000年4月

花園大学社会福祉学部長・人権教育研究委員会委員長

西野 孝

学生と性

——性とは何人にも譲り渡すことのできない

その人の権利であり、生命である ——

辻 光 文

(花園大学社会福祉学部非常勤講師)

はじめに——人生とは

こんにちは。昨日は入学式でした。

皆さんは「新入生歓迎号」を読まれましたか。おならをするのも本を読むのも習慣です。薄いこの1冊ぐらいは是非、最後の最後までじっくり読んでほしいと思います。そうすると、この大学が皆さんに何を望み、何を期待し、教職員たちが何を考えているかということがわかるだろうと思います。皆さんは今まで中学、高校で、やれ偏差値、試験云々と競争をしてきて、自分というものをどれほど深く考えて歩んでこられたかなと思います。

人生というのは何なんでしょう。ひろさちやという人がおられます。評論家です。「人生は混雑した列車に乗っているようなものだ」と言っています。その列車は各駅

停車をしながら果てしなくどっちに進んでいっているか
という、老病死、老いてやがて死んでいくという方向
に進んでいっているのです。しかしながらその列車には、
グリーン車もあれば、指定席もあれば、自由席もある。
自由席の中でも混雑していますから立ちっぱなしの人も
あります。各駅停車をしながら進んでいく。今年、高校
を卒業してこれからという時に、何人もの若者が交通事
故死をしているのが新聞に載っていました。交通事故死
はニュースにもならない世の中になっていますが、アッ
という間にこの世を去っていきます。やがて皆、去って
いきます。

人生にはいろんな出会いがありまして、その中で自分
が変わっていくのです。自分なんてのは本来、ないんだ
と思っています。関係存在、関係の中に自分があるんだ
と思います。皆さんは列車の中のグリーン車の客だと思
いますか。指定席の客だと思えますか。自由席の客で立
ちっぱなしだと思えますか。ずっと立っていると思って
ても、やがて下りる人があって座れる人もあります。最
後の最後まで立ちっぱなしの人もあります。生きるとい
うことはどういうことなのか。人に足を踏まれながらで

も我慢して立っていないといけない人もあるかも知れませんが。また、悠々と恵まれた運に乗って行く人もあるでしょう。けれども最後は死というものがあるのです。人への思いやり、人生の中で自分というものをどういうふうにとらえるかということ、ぜひこの大学で学んでほしいと思います。

一日の時間と人生の時

私は今70歳です。皆さんは大方18歳でしょう。いつどこで終わるかわからないけれども、私は人生という1日のどこを生きているかということと夜中の11時なんです。皆さんはどうですか。朝のまだ6時ですよ。6時の人に対して今11時の人が対峙しているのです。ある優れた全能者がいて、皆さんと私の寿命を引き替えることが可能だと言われても、私はごめんと言います。人生はそんなに若ければよいというものじゃないんです。皆さんは朝やっとな夜が明けたばかりです。皆さんのお父さん、お母さんは何時頃を生きていると思いますか。おそらく午後2時か3時くらいでしょう。陽が昇って暑くてやりきれない。午後の日差しがまだきついところを生きているだろ

うと思います。皆さんはやっと夜が明けたばかりです。だんだんこれから陽がさして、暑い時を耐えて、夕方の涼しい時を迎えるのです。大変だなと思いますよ。ぜひ人生を貫徹して、「ここで下りなさい」と言われた時は、喜んで「ありがとう」と行って下りていくような人生であってほしいと思います。

自己と人生の真実

ただそこでね、一体皆さんは今までどれほど自分ということの真実を考えてきたんでしょうか。花園大学の看板、宣伝、アートのようなものが京都駅に掲げられています。そこに英文と日本語で書かれた言葉があります。エスカレータを上っていくと見えますね。「自己の外に真実のありかを求めるのは皆、愚か者である云々」。自分の外にということはどういうことでしょうか。7～8年前、重度の障害者で、視覚障害の学生が入ってきたことがありました。4年間生活をして卒業する時に語ってくれた悲しい話です。彼が初めて学校へ来て学生食堂に入り、注文したものをお盆に乗せてもらっていた時、そばにいた学生が、「おい、お前ら、こいつの面倒みてや

れや。社福のやつおらんのけ」と怒鳴ったらしいのです。自分が案内して座らせたならそれで終わりなんですよ。世話をするのは社会福祉の学生みたいな、自分を外にした話です。何年も前の話ですが、自分を抜きにして考えているのです。この大学は学長や柳田先生やいろんな方が、尊厳のある自己について話をされていましたが、数ある大学の中で、人権の問題の研究、そしてその拡張を学内に提示している、学是としている学校は私が知るかぎり他にはありません。禅は自己の探究を目的としていますが、それをさらに深めた現代的な展開だと私は思っています。

あなたの人生にもよき出会いを

今日はセックスの話をしようということで、いろいろ考えたんです。セックスというのはなかなか言いにくいんです。精々新入生歓迎号の“学生と性”という私の小文を読んで下さいね。他にもいろんな学科の先生方が書いています。「20世紀、私にとっての事件」、一人の先生方が今まで生きてこられた中で大きな問題が見事に表現されています。相田みつをとという方がいますね。「そ

の時の出会いが人生を根底から変えることがある。よき出会いを」というのです。花園大学での一人ひとりとの出会いが人生を大きく変えると思います。私自身も、この先生たちとの出会いの中で人生の方向を決めさせてもらいました。どうすればいいのかわからない時に、北斗七星を見いだしたような思いがありました。私がこの大学を卒業したのは27歳の時です。16歳で入ってきて27歳まで何をしていたのか。途中で退学して学校の教員をしていたり、いろんな縁がありまして、とにかくいろんなことをやりました。アルバイト的な生きるための糧ですが、経済的に豊かだったのはトラックの運転手をやっていた時でした。そのいろいろな生活の中で、実に見事に私はいつも生かされてきたという気ががします。この大学を出てから、大阪の港のハシケの子どもたちを預かる施設の指導員として就職しました。夫婦で行ったんですが、その子どもたちと一緒に365日、24時間過ごしました。その後、31歳で辞めて、教護院、今は児童自立支援施設と言いますが、そこで24年、計28年、施設の中で24時間、365日、延々と正月も、春休みも、夏休みもなしにずっと一緒に暮らしてきたんです。鍵のかかった

ところではないのです。16名の子どものうち皆、逃げて
しまって3人しかいなかった悲しいこともありました。
ただ黙々と精一杯生きてきたんです。その時はわかりま
せんでしたが、今は何の悔いもなく、いつ迎えがきても
「ありがとう」と言って人生を終えられるような気がし
ます。

是非「HIV」への関心を

今日は、性の話をするならエイズの話をもう少し詳し
くしようと思っていました。エイズウィルスはこれから
の人間をどうしようとしている生き物なのか。不思議な
ウィルスです。この問題を考えるだけでも生きるという
ことを深く考えられるのではないかと思います。朝日新
聞につい最近大きな見出しで「南アフリカを襲うエイズ
の脅威」とありました。紛争で20万人が死んだのに、エ
イズに感染して死んでいかなければいけない人が、その
10倍もあると書かれていました。貧しさのためにますます
猛威を振るう状態だと。エイズは歴史的には浅いので
すが、アメリカではエイズパニックという恐ろしい差別
問題にも発展しました。日本でもゲイの人たちだけの問

題だ、我々には関係のない問題だと言っていました、血友病になっただけでも悲しい人生なのに、それにさらにエイズに感染させられていた沢山の人がいます。それは非加熱製剤が原因でした。ミドリ十字と厚生省のトップに立つ連中が企業の利益を守るために、エイズの感染を黙視していたという許せない事件でした。川田龍平君などの若い人たちの敢然とした自己主張、闘いをご承知だろうと思います。この問題だけでも人間が生きる深い問題を考えさせられるのですが、花園大学はいち早く、「エイズ入門」という本を出しています。エイズの周辺ということで公開講座を収録したものです。せめてこういう本をも読みながら、自分の生きる問題を広げてほしいと思います。

「D.V」って知ってますか

社会的・文化的な性差という意味でジェンダーという言葉もされていますが、日本の文化はまだまだ男性優位、女性がかかなり虐待されている文化がまだまだ横行しています。男性の横暴な行為が平然と行われている社会だと思います。有名になったのは大阪府知事ですが、お

話になりません。「フェミニズムと資本論」という題で北明美先生が新入生歓迎号に書いています。自分がこうしてあるのは、フェミニズムの発展によってもたらされた。感謝していると。女性差別の問題についてはもっと考えていかなければいけないと思います。この大学では人権教育研究室を中心に、セクハラについての委員会が組織されています。相手が希望しないことを要求することはしてはならない。敢然と声を上げることだと思います。DV（ドメスティック・バイオレンス）も問題になっています。「DV根絶の体験を聞いて」という記事が先日新聞に載っていました。家庭内暴力だけではなく、夫、恋人による暴力として考えてもらいたいと思います。アメリカでは殺人問題にまで発展して、毎日、何十人命を落としているといえます。アメリカでは20年前からこの問題が出ているのですが、日本ではやっとここ5、6年の事です。駆け込み寺的な、アメリカではシェルターという、女性が暴力から身を守る場所があちこちにできています。日本では辛うじて婦人相談所、母子寮で夫からの暴力から身を隠し、名前も隠して住んでいる位で、限定されていて、本当にわずかしかなくてお話になりませ

んが、被害届が出ていないんですね。性犯罪の被害届は暴力を受けた人の1割を下回っているといえます。しかし被害の実態はあるのです。

女の方は、もっと男を見る眼をもってほしい

皆さんの知っている格言は「失敗は成功の元」ですが、「セイコウは失敗のもと」というのは私の作った格言です。性交には特に人権を配慮してほしいのです。この大学に入ってきて、妊娠、出産の問題で学業が疎かになり、悩んでいる人も身近に私のかかわる範囲にいます。そんな悲しいことがないように。ここは学問をするところです。真理を求めるところです。「学問は全人的でなければいけません。一人ひとりとして生きる個人があって、それがよりよき人生を生きるための真理を求めるのが学問というもの」という西村先生の文章もあります。日本人の性行動について最近厚生省が初めて調査をしました。性体験をする人がどんどん低年齢化して、中学、高校までに4割の人が性体験があるといえます。その中で避妊具を使わないで性経験をするのが5割。なぜ使わないのか。男の側の身勝手にあると思います。女の方が「避妊

具を付けてください」と言えない雰囲気がある。それを言えば嫌われる、捨てられるというバカな男を見抜けない人にならないように。女の方は特に人権感覚がある男かどうかを見抜く力が必要だと思います。

いのち一つの自覚

人生はジグソーパズルと似ていると思います。一人ひとり決まった位置があって、意味を持って存在しています。パズルが一つ外れてしまうと全部だめになります。その人はそこしか嵌まらない、ジグソーパズルのような人生、しかも生きていくことは、人間だけでなく、草木もつながった一つの総合体です。それが命なんだと思うのです。その時に初めて、そのまま自分を肯定して生きられるでしょう。しかし一方で平和を願い、一緒に生きようとする人間が、なぜ人を排除するのか。なぜ排除の思いがその隣から出てくるのか。排除することと抱擁することが矛盾して隣り合っている。人間の問題であると同時に自分の生き方の問題だと思います。人間はもともと生理学的に言うと、皆昔は女だった。ホルモンの力によって男というものが形成されてくる。胎児の時に

脳は一緒なのに、男の脳と女の脳が変わってくる。ジェンダーという社会的、文化的な役割が作られたものになってくる。もっと原点に帰った自分を見つめて、そこから生きることを考えてほしいと思います。

真実はもうチラッとわかっている筈

この大学は障害を抱えた学生を早くから引き受けてきていました。何もない小さな大学の頃は車椅子の人が来ても、4階建ての教室にわんさわんさと担ぎあげていていました。今はエレベータで一人で行けます。一長一短はあると思いますが、両面を追求して、疑問を持ちながら生きることを考えてほしいと思います。皆さんの年齢では既に人生の真実が見えていると思います。これからどうなっていくか。知識や小細工だけが上手になって、今が頂点で墮落していく、といったことにならないで下さい。うっかりするとそうなりかねないところがあると思います。

私が中学校の教員をしていた20歳前後の頃に、柴山全慶という、雲水を指導する立場の方が、一つの詩を書いて送ってくれました。「花は黙って咲き、黙って散って

いく。そうして再び枝に帰らない。けれどもその一時一処にこの世のすべてを托している。一輪の花の声あり、一枝の花の真実である。限りない命の歓びが悔いなくそこに輝いている」。これだけあればお経も何もいらぬ。人生はこれしかないと中学の教室の黒板の上に大きく書いて、「人生はこれだぞ」と言っていたことがあります。それから3、4年して、学校を辞めて、半分乞食のような生活をする中で死にたくなつたんです。あれだけ生き甲斐を感じていた私が。けれどもこの言葉だけは忘れないで、トラックに乗りながら口ずさんでいたことがありました。この詩のことはまた後で話します。

自己と共生の命

「共に生きる」ということを具体的に一人の人を通して考えてみたいと思います。私は後々になって非行とか不良と言われる子どもたちと一緒に暮らしていたんですが、そういう子どもは社会に迷惑をかけるけれども、能力的にも体力的にも何の不自由のない子どもたちです。絶対許せないことを次々にやる。家庭からも地域社会からも学校からも追い出されて私達の施設にやってきた子

どもたちです。「あんたら、ええ加減、自立せよ」と言っていました。自立はどういう意味か。当時自分で稼げと
いうくらいの浅薄な意味だったと思いますが、本当の意味で自立とは何か。命を考える時に深めてほしい問題です。いろんな障害を持っている方がおられます。

柏木正行氏のこと

障害を考える時に、私は柏木正行という人のことを思い出さずにはおられません。現在も、伏見区で暮らしておられますが、私が教護院で生活している時に、花園の学生が車椅子で彼を連れてきたんです。35歳でした。あんなに重度の障害を持っている人に出会ったことはありませんでした。「どうしている？」と聞くと「街で暮らしています」と言うんです。エッ。手も動かない、脳性マヒですから言語障害もある。右手が少し動く。手術するたびにますます動かなくなる。何をするにも他人を煩わせないとできない。排泄もそうです。

24時間、二人の学生で介助しているというのです。この4月から介護保険法ができて、高齢者は社会的な介護で支えるということになりましたが、ずっと以前に学生

たちがやっていたのです。花園大学の学生もいました。柏木さんはそれまで園部のこひつじ苑で暮らしていました。しかしそこを出るといふんです。障害者の自立運動という世界的流れの中で施設を飛び出したんです。自分の意思で。車椅子を押すのは学生たちですが、学生は大きな力を持っています。60年安保、70年安保の闘いは学生が中心でした。いろんな問題を持ちながら今もなお若き日の純な思いを持って生きている人もいます。途中で変質した人もいますが、しかし学生は社会を変えていく力があるのだと思っています。

柏木さんがいた施設は田んぼの中にポツンと立っていました。そこで生活している柏木さんは何もかも世話をされて暮らしていました。柏木さんは口で棒をくわえてカナタイプを打ちながら覚えた平仮名で一編の詩を書いています。「一日」という詩です。「朝、むりやり起こされ、尻をめくられ、厭味の一つも聞かされながら差し込まれた尿器に小便をさせられ、コップ一杯の水でうがいをさせられ、寝ぼけ眼の寮母に熱いタオルで顔を拭われ、運ばれてきた3切のパンを1本の薄い牛乳で腹に流しこまれ、ウンコがしたくなれば、便所に連れていかれ、出

るまで座らされ、肛門を撫でまわされ、風呂の日は風呂場に連れていかれ、丸裸にされ、職員同士の猥談を聞かされながら洗い台の上で耳の垢までこすりとられ」と延々と続くわけです、柏木さんの日課は、自分でできないのですから。言葉も発しない。何を言っても安心だ。スッポンポンにして「あんたのチンチン、大きいな。一丁前だな」と職員は言ったかもわかりません。肉の塊としか見えないような人に対するあり方で平然とやってしまう。

人権を生きる

人権というのは何なのか。柏木さんは、そこを出る時に、こんな詩を書いています。「自立、そんなもの絵に描いた餅や。頭で考えたかて実際にはどうにもならへんや。アパートに一人住んで、おしっこやウンコしとなったらどないするんや。動かん手してどうして飯を食うんや。足も立たんのにどうやって買い物に行くんや。そんなこと考えんと、施設でおとなしゅうして死ぬのをまてんや」。ちょっと皮肉を込めた形で自分の身を振り返って書いているわけです。柏木さんは悶々としながらまた、いろんな思いを表現しています。「幸せのうた」

という詩。「幸せの人、それは僕たちのことです。自分だけでは生きられない僕たちが、こんなに施設に入れたんですから。毎日、決まった時間に決まったものだけ食べられ、夏は涼しくしてもらい、冬は暖かくしてもらえるのですから。女の垂れながす小便をすぐ近くで見られるのですから。だから僕たちは幸せなんですね。ほんとに幸せなんですね」と。

柏木さんが施設を出たのは、国際障害者年、完全参加と平等という国連の運動があったその3、4年前のことです。敢然と生きる生き方を選んだんです。柏木さんと出会った時、最初に思ったのは、「明日のことを思いわずらうことなかれ。明日は明日自身が苦しまん」というマタイ伝の有名な言葉がありますが、柏木さんはこんな生き方をしているのだなと思いました。学生が引き出して、アパートを借りることもしたわけですが、ローテーションで朝から夕方まで一人、もう一人は夕方から翌朝10時まで付き添って暮らすことを、チームを組んでやっていました。学生ですから寝坊したり忘れたりして朝からベットの上でおしっこもウンコも漏れそうになったこともあったそうです。明日のことはわからないんですね。

そういう生き方を積み重ねながら、この方は母親に対しても敢然と自分の自立を勝ち取っていったんです。そして自分の思いを書きつけています。

自立してからの生活でこんな詩もあります。「僕は自立した、そして6年がたった。自立したとき、じきに死ぬかもしれないと思っていた。そして死ぬ覚悟もしていた。しかし死ななかった。6年後の今、ほどよく暖房のきいた部屋で、こうしてワープロと向かい合っている。こんなことでよいのだろうか。夢ではないか。疑いたくなる。しかし夢ではない。私は死んでいない。確かに今、生きているのだ。なぜ施設から出たのだ。どうして施設でおとなしくしていなかったのだ。寮母さんに可愛がられながら人生を終わらなかったのだ。浜本が死んだからか。女がほしかったからか。冒険したかったのか。自分を試したかったのか。それで自立したのか。でも一体自立して何や」。

この中でいろんな問題提起をしていますが、自立という時にかかわったのは家族なんです。「お袋も妹夫婦も何しにきたんや。俺が自立しているから。はるばるきたのか。なんで俺が自立したらあかんのや。友だちがこな

くなった時のことを考えるからか。火事になっても逃げ出せないのを心配しているのか。糞に塗れたままほっておかれるのではないかと思うからか。一体なんでや。なんで今頃きたんや。そんなに心配やったらなんで今までほったらかしにしたんや。どうして勝浦に連れていってくれなんだんや。とにかく俺は自立するんや。絶対やり抜くんや」と自立していくプロセスの中で書き留めています。

この世の真理

健常であろうが、障害を持つのが、自立は人権を重んずる関係存在の中で立つということだと思っています。それ以外にはない。そういう意味で命をもっと深く考えてみたいのです。私は定年退職後、彼と車椅子を押しながら、岐阜、静岡、長野、そして南は九州の水俣まで出歩いたことがあります。そして、健常者と障害者とは別ではない。区別はできても切り離すことのできない一つのいのちであることをアタマではなく、カラダでしみじみとわかりました。命というものはころっと存在するものではない。私は今、「自分」というものがあると思っています。あっていいのですが、それは関係存在として

あるのです。皆さんがあって、私があって、すべてはそ
の中で交わされている命の動きです。そういう意味で私
というころっとした個人はないのです。このものの自覚
が、禅で主張している「空」という言葉です。仏教では
3つの真理を言っていますね。一つは何もかも移り変わっ
ていくのだということ。毎日、刻々時は移り変わって
いきます。変わらないものは何一つない。諸行無常です。
二つめはこの世に存在するものは皆つながって存在して
いる。それを何というか。この世にあるものひとり非ず。
仏教の坊さんは諸法無我と言います。本当に人間の安ら
ぎはどういうふうになり立つか。涅槃寂静とか言います
が、やさしい言葉で言えば、己なきものに安らぎあり。
自分を無視してしまうのではなく、ここを深めてほしい
のです。自分というのはわかっているようで、一番わか
らない問題だと思います。人を包摂しようとする思いの
横から排除しようという念が沸き起こってきます。「仏
法と鉄砲」という言葉があります。仏法は自分を深く省
みる。鉄砲は相手を撃つ。お前が間違っていると。しか
し、これは二つ別々のものではなく、人間の一人の中に
存在する。人間は矛盾的な存在なのです。その問題を抱

えた自分自身、私自身ということで深めてほしい。

私は一輪の花

先の「花は黙って咲き、黙って散っていく」詩のことですが、仏教では命のことを花にたとえていうことが多いのです。自分を一輪の花として見て下さい。その花がどなたどこで咲いた花か。アスファルトの割れ目に咲いたスミレの花であるのか。耕された畑のなかの豪華なぼたんの花か。深山幽谷の人も鳥もこないところのユリの花なのか。花はどなたどこにあってそこで咲くわけです。散る時がきたら黙って散っていく。黙ってというのは決して文句を言わないで黙々というのではない。宗教の世界は、それを利用する側とつながった時、問題が起こります。臨済禅がかつてお寺のお金を使って、臨済号という飛行機を作って、中国への爆撃に使った歴史があります。なぜ人の命を尊び、人権の究極的世界を具現しようとする禅がそういう行為に出るのか。それは禅じゃないのです。人間の相対的な世界の中で、選択された価値観の中での行為でしかありません。黙ってということは決してそうじゃないとういことを十分踏まえて考えて

下さい。自分はどんな花なのか。どんなところに咲いた花なのか。どんな能力の花なのか。大きいのか小さいのかにかかわりなく、花は精一杯に咲いて、散る時がきたら散っていきます。その花としての自分というものをぜひ生きて下さい。

これから4年間、いろんなことがあると思います。自分というものを明確に掘り下げながら、答えはある日、ある時にわかるのではなく、いつもその問題を深く思い続けながらわかってくるのではないかなと私は思っています。私は今のところ自分でおしっこもウンコもまだひとりです。夜中の11時ともなればもう時間の問題です。皆さんはこれからですが、これから夜中の12時まで、途中で勝手に下りるということは絶対にしないで下さい。私がこの学校にきた時に、一人の学生が花園駅の線路に飛び込んで自殺した事件がありました。真面目だと言われる学生でしたが、自分だけで自分の内側にこもりきった生活の中でこの世を去っていったのです。50数年たつ今でもまざまざと思い出します。親の悲しみは当然です。自分の命を大事にする。自分の命を大事にすることは同時に他の命を大事にすることです。まさに人

権の究極の問題です。自分というものを深く見つめながら生きて下さい。

花のいのち

以前この詩を日常的に歌えないかなと思って編作詞しました。

〈花のいのち〉

原作 柴山 全慶
編作詞 辻 光文

- 1 花は黙って咲いている
花は黙って散ってゆく
再び枝に帰らない
花のいのちの音がする
- 2 その時 そこに輝いて
精一杯に咲き続け
すべてを托している姿
花のいのちの音がする
- 3 何を永久と言うやらん
過去も未来も現在も
今 そのままにある姿
花のいのちの音がする

家でデイサービスをしています。近所のお年寄りの人と食事をしたりカラオケを歌う会をしています。80歳、90歳の人たちが皆知っている曲といえば鉄道唱歌なんで

す。それで歌おうとするとしっくりしない。坊がつる讃歌は、竹山仙史という人が作曲している、阿蘇の麓で夜空の星を歌った山男の歌です。哀調があるのですが、心をゆさぶるものを潜ませています。この曲で歌うとしっくりします。悲しい問題にぶつかった時、自分は一輪の花なんだ。絶対に他と比べようのない一度きりの花だという思いで、心をこめて詩を歌うと、また元気が沸いてくるような気がします。宗次郎というオカリナの名手の曲で口ずさんでもらえたらと思います。この詩の中から何か手に入るものがあるだろうと思います。長時間ありがとうございました。